国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism
Press Release

令和元年 6 月 21 日
鉄道局鉄道事業課

「地方鉄道の誘客促進事例集」を公表
～28の取組事例から学ぶ 誘客促進・経営改善～

国土交通省は、各鉄道事業者や地方公共団体の参考となることを目的として、28の地方鉄道に対して誘客促進・経営改善の取組をヒアリング調査し、事例集として取りまとめました。

地方鉄道は、沿線人口の減少等に伴う利用者の減少により、厳しい経営状況に置かれている路線もあるところですが、地域一体となって鉄道利用を活性化させるとともに、鉄道の維持・存続を図るために様々な取組を行っています。

今般、国土交通省では、各鉄道事業者や地方公共団体の参考となることを目的に、地方鉄道を核とした誘客促進の取組や、鉄道事業再構築事業者における経営改善の取組について、鉄道事業者へのヒアリング調査を実施し、「地方鉄道の誘客促進事例集」として取りまとめました。

【取組例】

1. 沿線のおもちゃ美術館とコラボレーションした「おもちゃ列車」の運行
   由利高原鉄道
2. 沿線の温泉施設や映画館等と連携した企画乗車券の販売
   高松琴平電気鉄道
3. クラウドファンディングを活用した資金調達によるラッピング列車の実現
   しなの鉄道
4. 映画公開を契機とした日本最古級車両の体験運転イベントの実施
   一畑電車

事例集については、国土交通省ホームページにおいて公表しております。
※［URL］ http://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk5_000002.html

【問い合わせ先】
鉄道局鉄道事業課　浪岡、岩井
代表 03-5253-8111（内線 40664）　直通 03-5253-8539　FAX 03-5253-1635

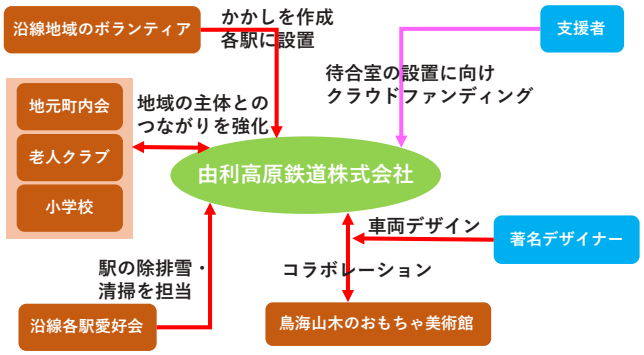
【一部抜粋】地方鉄道の誘客促進事例集（由利高原鉄道）
事例集全体については、国土交通省ホームページにおいて公表しております。
［URL］http://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk5_000002.html

第三セクター

由利高原鉄道株式会社

様々な「仕掛け」のイベント列車を走らせ利用促進を工夫する

秋田の文化・資源を活用し沿線地域と鉄道双方の魅力向上・PRを図った



重要ポイント

取り組み事例１

秋田の伝統的衣装姿による接客

＜沿線の資源を用いた効果的な情報発信＞

秋田おばこ姿の列車アテンダントが乗務し、グッズ等の販売含め沿線の魅力をＰＲ。列車に愛称名をつけてアイデンティティを向上。

取り組み事例２

沿線住民が作成した「かかし」を駅に設置

＜「かかし」を見たくて乗車機会を誘発＞

小沿線各駅の愛好会や、地元町内会、老人クラブ及び小学校との連携を強化。沿線の魅力向上と利用促進を図る。

取り組み事例３

沿線に新設された美術館と車両のコラボ

＜一体的なデザインでの相乗効果＞

魅力あるデザインの車両に改造。篤志家からの寄付やクラウドファンディングにより効果的に事業資金を調達。

会社概要

1985 年に国鉄矢島線を継承し、第三セクターとして開業。路線長 23km の地域の鉄道として鉄道事業を手掛けるほか、バス事業（※）、旅行業なども展開している。沿線では菜の花や桜、鳥海山などの自然景観を愉しむことができるほか、季節ごとに企画されるイベント列車も充実している。
※バス事業は、2019 年秋のトップシーズン後廃止予定

取り組み事例１

「まごころ列車」の運行

「秋田の伝統的衣装」秋田おばこ姿のアテンダントが乗車

きっかけ　鉄道の認知度を上げたかった

由利高原鉄道では、アテンダントによるおもてなしのある「まごころ列車」を運行していますが、これを始めたのは 2013 年 7 月です。1 日 1 往復、秋田おばこ姿の列車アテンダントが乗務し、お客様のご案内や乗降補助などを行います。また、列車にはヘッドマークを掲示しています。

実は、この列車には、従来より列車アテンダントが乗務していました。しかし、列車に愛称名が無かったため時刻表にも特に記載がされず、列車アテンダントが乗務する列車の見分けがつきづらかったことから、「まごころ列車」と愛称を命名することとしました。これにより、時刻表への掲載を狙うとともに、親しみを持っていただき、秋田おばこ姿の列車アテンダントを全国に向けてアピールすることをねらいとしています。

成果　継続は力なり

「まごころ列車」では、秋田おばこ姿の衣装を着用したアテンダントが沿線の魅力を PR するとともに鉄道グッズ、特産品を販売しています。また、インバウンドの外国人乗客にも対応し、紙芝居風の案内が好評です。直接的な効果としては、利用者数の増加のほか、TV 等のメディアへも取り上げられ、SNS で話題になった等があげられます。このほか、列車のイメージ向上、物販促進によって由利高原鉄道の中での新商品の開発意欲の醸成といった、数字では表現できない効果が出ています。

	2015 年度	2016 年度	2017 年度
輸送人員	223 千人	223 千人	194 千人
経常損益	△ 85 百万円	△ 85 百万円	△ 99 百万円

開業年　1985 年
運行区間（長さ）　23.0km

取り組み事例 2　連

「かかし列車」の運行

沿線各駅にかかしを設置。乗客の投票によりコンテストを行うなど盛り上げ機運を醸成

概要　沿線の人々が作った「かかし」で利用促進を

毎年秋、沿線各駅では地域のボランティアが作成した「かかし」をホームに設置しています。由利高原鉄道のホームページでは、利用者向けに「各駅のホームにボランティアでつくっていただいたかかしが大集合し、お客様をおむかえ致します。」、「個性豊かなかかしをお楽しみください。」等とアナウンスしています。また、沿線の人々に対して「かかし」の作成を依頼するので、「一緒にかかし列車を盛り上げてくださる『オリジナルかかし』を募集致します」とアナウンスして協力を呼びかけています。２０１８年秋には全体で５５組６２体の「かかし」が沿線各駅のホームに立ち、沿線住民と一体となった駅の賑わい創出となりました。

工夫　実は「話題性」と「地域の連携」を巧みに用いた利用促進

この取り組みで駅に設置された「かかし」は、地域に話題を生み出しています。また、駅舎周辺の除排雪や清掃を担う沿線各駅愛好会をはじめ、地元町内会、老人クラブ及び小学校との連携を強化し、魅力向上と利用促進にも寄与しています。

「かかし」の設置期間中は、人気投票も実施しており、不正投票ができないよう、投票用紙は列車内に置かず、駅での切符購入の際に手渡しするなどにより管理しています。

この取り組みは、沿線駅愛好会等との連携強化により、乗車機運も高まり好影響を与えています。しかしながら、沿線住民の高齢化により、「かかし」制作数が減少しているという悩みも出てきており、次の手を考えねばならないところです。

取り組み事例 3　コ ノ 連 金

「木のおもちゃ列車」の運行

沿線に新設された木のおもちゃ美術館とコラボ

きっかけ　国登録有形文化財が美術館に変身

由利本荘市では、国登録有形文化財の木造校舎（旧鮎川小学校）を、東京おもちゃ美術館の監修により「鳥海山木のおもちゃ美術館」としてリニューアルしました。美術館のオープンにあわせ、2018 年 4 月まで「池田修三ラッピング列車」として運行していた車両が、篤志家の寄付により「木のおもちゃ列車“なかよしこよし”」として生まれ変わることとなりました。

列車のデザインは、「オフィスフィールドノート」（福岡市）砂田光紀代表が担当。砂田代表は沿線の「鳥海木のおもちゃ美術館」のほか、「東京おもちゃ美術館」（新宿区）の総合デザインや「長門おもちゃ美術館」（山口県）で運航する「おもちゃ船」の改修なども手掛けた方です。デザインの基本方針は、

- 18 年走り続けた列車をリファインし、これまでにない高原の特別列車に仕立てたこと
- 木の良さを生かし、美術館へ人びとをいざなう列車としたこと
- こどもたちに夢を与え、鉄道の旅に憧れを抱くようなデザインを目指したこと

として、列車のデザインが行われました。

工夫と効果　美術館と車両のコラボで利用客増加

「木のおもちゃ列車”なかよしこよし”」の誕生は、沿線施設とそれをテーマにした列車のコラボレーションが話題を呼び、利用者の増加につながりました。おもちゃ美術館の利用者のため、駅と美術館との間で運行されているシャトルバスの待合室にクラウドファンディングによるおもちゃ待合室を設置し、利便性の向上と話題性に寄与することができました。

ハート模様の連続する曲げ木のスクリーン

厚さ15㎜のナラの無垢材

森をイメージしたグラスアートを施したブラケット灯。
台座は秋田杉を使用。

まとめ　誘客への強い思い

沿線周辺地域の人口減少や、公共施設の郊外化、車社会の発展により鉄道利用客は激減しており、今後も顕著と思われます。生活の足を確保する役割を担う鉄道ですが、観光利用の促進も図っていくことが重要です。

2019 年 1 月には「秋田ニューバイオファーム」とコラボしたユリテツカレーを発売、2019 年 4 月からは終着矢島駅のプラットホームに「ゆりてつホームカフェ」を開設し、矢島地域を中心に 4 つの菓子店の秀逸商品をお茶うけとして提供するなど、沿線地域事業者との異業種のコラボレーションを実現させました。首都圏等での情報発信力の強化と併せ、異業種との連携により鉄道を含む沿線の魅力（鉄道×旅×食＋α）を磨き上げ、周辺観光地と連携した着地点として選ばれる地域になる必要があると、由利高原鉄道は考え、様々な活性化・利用促進の取組を展開しています。